

南極OB会 会報

No. 24

発行 南極 OB 会
編集 会長 国分 征
広報委員会

今号の主な内容

- 新年のご挨拶 ○第 56 次隊の壮行会開催 ○第 17 回「南極の歴史」講話会
- 話題：「オーロラ会」の紹介 ○村越 望さんご逝去
- 南極関連情報 ○支部便り（北海道、信州、茨城）
- 隊次報告（11、27、35 次） ○新刊紹介
- 「先代しらせ」の公開予定 ○会員の広場 ○広報委員会からのお知らせ

新年のご挨拶

南極 OB 会会長 国分 征

2004 年 11 月に発足した南極 OB 会は、10 年の年月を刻んだ。会員のみならず一般に広く理解を求める目的で、OB 会の活動や観測事業の展開を伝えるため会報の発行や講演会などの活動を行ってきた。また、「南極の歴史」講話会を立ち上げ、体験した人達が語る南極観測の歴史を記録に残そうとする試みを続けている。これまでは、講話会は東京で行われてきたが、地方支部での開催を視野に入れて計画をたてることも検討されている。

船の科学館で公開されている初代南極観測船「宗谷」の説明員は、従来、「宗谷」のクルーOB のボランティア活動として行われていたが、これへの参加が一昨年からは始まり、さらに船橋港に係留されている初代「しらせ」船上で開催されるイベント「チャレンジ SHIRASE」への協力など活動の幅を広げてきた。

本年は、砕氷船「ふじ」の就航とともに



國分会長

南極観測の恒久化を目指して始まった昭和基地再開から 50 周年を迎える。また、「ふじ」は「南極の博物館」として名古屋港ガーデン埠頭に永久係留されているが、数えて 30 周年にあたる。これを機会に、記念事業などを企画し、OB 会活動の新たな展開につながることを期待している。

第 56 次隊の壮行会開催

南極 OB 会主催の第 56 次南極観測隊の壮行会が、2014 年 11 月 7 日（金）午後 6 時半より、東京都千代田区一ツ橋のレストラン「アラスカ」パレスサイド店で開催された。第 56 次隊員 28 名を含めた総勢 64 名が参加した。壮行会に先駆けて、講演会、観測隊計画の概要の紹介があった。

講演

神戸大学教授 柴田明穂氏により、南極条約と最近話題になっていた南極海における日本の調査捕鯨、鉱物資源活動を例にした講演があった。

野木義史隊長による第56次隊の計画

第56次隊は総勢59名(夏隊33名、越冬隊26名)で編成され、夏隊同行者は過去最大の26名が参加する。「しらせ」は2年間にわたって接岸が出来ない状態が続いたが、昨年、第55次でやっと接岸が実現した。しかし、今年も海氷は依然として厚く、予断は許されない状況である。第56次観測



野木第56次観測隊長

隊で集中的に実施される分野横断的な大型の重点観測は「南極域から探る地球温暖化」である。この課題の下で、①南極域中層・超高層大気を通して探る地球環境変動、②南極海生態系の応答を通して探る地球環境変動、③氷期-間氷期サイクルから見た現在と将来の地球環境



を中心に行う。一方、公開利用研究と位置づけられる観測船のプラットフォームを有効利用した「海鷹丸」による観測が実施される。

壮行会開催

門倉 昭(50次越冬隊長)氏が司会を努め、壮行会が始まった。國分 征南極OB会会長の挨拶、初代しらせの最初の艦長を努めた佐藤 保氏の祝辞が続き、福谷 博氏の発声で乾杯、懇談に入った。

宴たけなわ、地方支部の茨城支部から多賀正昭氏の祝辞、牛尾収輝第55次越冬隊長からの祝電の披露があった。野木観測隊長、及び三浦英樹越冬隊長の挨拶の後、隊員の元気溘刺な自己紹介があった。竹内貞男氏の中締めで壮行会を締め括った。

南極条約体制 南極科学活動と

法政策のインターフェイス

南極海捕鯨事件を踏まえて

神戸大学大学院国際協力研究科・教授(国際法) 柴田明穂

本講演は、南極科学と南極法政策との密接な関係を解き明かし、今後、南極に関わる法政策の展開において、自然科学研究者と社会科学研究者とのより緊密な協力関係の構築が必要であることを論じた。

まず例として、最近話題となった南極海における日本の調査捕鯨が、国際法に違反

すると判断された国際司法裁判所の判決が紹介された。この事件は、国際捕鯨取締条約第8条に規定される「科学的研究のため」の捕鯨であるかが争われ、日本の調査捕鯨計画のデザインと実施方法が科学的ではないとして違法と判断されたものである。もう1つの例として、2003年の南極条約協議



講演する柴田先生

国会議(ATCM)において、南極における隕石収集活動を「鉱物資源活動」と位置づけ、それを「科学的研究」を除いて禁止すべきとする決議案が採択寸前にまで至ったことが紹介された。これら2つの例は、禁止を

原則として科学的研究だけを許す法政策の危うさを物語っている。現在、ATCMでは、南極における生物試料の収集活動につき、それが遺伝資源として商業的に利用されることを理由に規制を強化しようとする動きがあることも紹介された。

南極法政策における「科学」の位置づけは、1959年の南極条約の構造によって決まっている。南極条約上は、第1条に規定される平和的利用の原則が絶対的であり優先される。第2条に規定される南極における科学研究活動の自由は、「この条約の規定に従うことを条件として」継続する。南極条約第4条は、領土紛争を凍結しているに過ぎない。他方で、南極海域における公海自由を害さないと規定する南極条約第6条は、南極への自由アクセスを確保する。これにより、明示に規制・制限されていない限り許容されるという活動自由の原則が、南極には適用されている。明示の規制としては、南極活動の事前通報と環境影響評価の実施(条約第7条、環境保護議定書第8条)の他、軍事的活動の禁止(条約第1条)、核爆発の禁止(条約第5条)、鉱物資源活動の禁止(環境保護議定書第7条)、特別保護地区への立入規制(環境保護議定書附属書V)などがある。この活動自由の原則を、南極環境を保護しつつ、また人命や財産の安全性を確保しながら、いかにして南極科学活動への支障にならないように展開していくべきかが問われている。南極条約体制は、

オーストラリアのような領土主張国(クレイマント)と日本のようなノンクレイマントとの間の微妙なバランスの上に成り立っており、南極における科学活動のあり方を含む南極法政策の展開には、自然科学者の現場的知見と社会科学者の制度的・解釈的知見とを組み合わせるべきである。

ある活動が「科学的」であるかどうか、もはや科学界の基準のみで判断されるものではないことは、先に挙げた南極海捕鯨事件判決で明らかとなった。国際司法裁判所は、日本の調査捕鯨計画のデザインと実施方法が合理的であるかどうかを、①非致命的な代替的手法の実用性を事前に評価していたか、②調査目標達成に合理的とされる以上の量の致死捕獲をしていないか、などを基準にして考察し、この基準を満たしていないが故に「科学的研究のため」の計画であるとは言えないと判断した。日本の南極海における調査捕鯨活動が、国立極地研究所などの他の南極研究機関と協力して行われていないことなども、日本の調査捕鯨が「科学的ではない」ことの理由として挙げられた。この判決は、「科学的活動」であるかが特に論争になるのは、原則禁止の中で「科学的活動を目的」にしている活動だけが例外扱いされている法制度の場合であることを示唆する。南極においても原則禁止となる活動が増えるほど、「科学的活動」であるかが厳しく問われることになる。またこの判決は、「科学的活動」であるかを判断する法的基準には、条約の規定のみならず、条約の下で発展させられてきた準則や指針なども含まれることを示唆する。南極の場合、ATCMで採択される決議や指針などがこれにあたる。

南極海捕鯨事件判決は、科学者も、科学以外の規制状況やそうした規制が議論される政治・外交的場にも関心をもち、外交官や法律家と協働して対処していく必要があることを、訴えかけているように思う。

第17回「南極の歴史」講話会

(2014年9月20日(土) 14:00~16:00 日本大学理工学部1号館)

第17回の講話会は、2014年9月20日(土)14時より、東京・千代田区神田駿河台1丁目の日本大学理工学部1号館131教室で開催された。

当日の講師二人は、ともに南極観測の初期から関係し、越冬3回、夏隊4回、84歳の吉田

栄夫さん、越冬4回、夏隊3回、85歳の川口貞男さん、南極観測の“古老”と言える方々。南極観測事業の歴史の長さを感じさせる内容であった。

吉田栄夫さんの講話は「マクマードオアシス・ドライバレー—昭和基地一時閉鎖で始まった日本人チームの挑戦—」。ロス海からドライバレーにかけての最新の地図などを示しながら当時の模様を報告された。

川口貞男さんの講話は「来年（2015年）南極再開50周年を控え『再開よもやま話』」。古い時代の写真をふんだんに紹介しながら、輸送の所管が海上保安庁から海上自衛隊に移管する事に反対論が強かった事など、当時の裏話などを語った。

マクマードオアシス・ドライバレー —昭和基地一時閉鎖で始まった日本人チームの挑戦— 吉田栄夫さん（2s,4w,8w,16s,20s,22w,27s）

プロローグ：1961年10月、ウェリントンで開催された第5回 SCAR 会議に、永田武博士に随行して電波研究所上田弘之博士とともに出席した。



吉田栄夫さん

第4次南極越冬隊長を務めた鳥居

鉄也博士は、この時行われた南極エクスカッションに参加し、ドライバレーの景観を空から見学して痛く感動し、日本人チームによる地球化学的調査を思い立ち、全米科学財団（NSF）極地局の援助を申請することとした。私は化学専攻ではないが、地形や気候など自然地理的環境の学徒として参加することとなり、申請書作成などにも携わった。折しも我が国の南極観測は中断中であり、永田先生もこの計画をサポートしたことが、最近私が見ることのできた永田先生から鳥居博士に宛てた葉書で分かった。

マクマードオアシス・ドライバレー調査：

NSF の支援を受けられることになり、1963年11月、横須賀の米軍基地内の病院で、米国の南極観測隊の基準を満たす身体検査を受けることから始まった。南極の夏季に航空機で現地に入るこのドライバレー調査計画は、1986/87 夏季シーズンまで続けられた。この間、1970/71 年には米国支援からニュージーランド南極局支援となり、またこの年度初めて研究者1名派遣の文部省予算が認められた。1971/72 年から日本提唱のドライバレー掘削計画（DVDP）の



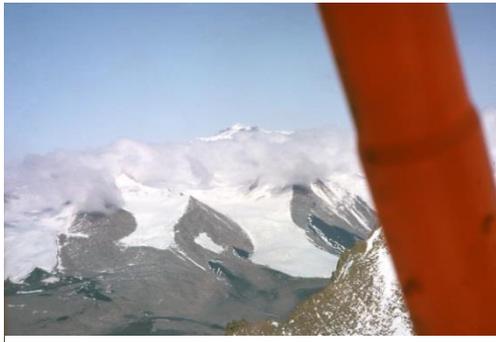
ドライバレー地域の地図

予備調査が始まり、1976年終了、その後マクマード入江掘削（MSSTS）、ロス海新生代研究（CIROS）などが続いた。

マクマードオアシスは面積2千km²の南極最大の露岩地域で、地球化学的研究の主要な目的は、オアシスという語に示されるような、固有名詞としてのドライバレーにある特異な湖や池の調査であったので、最後の頃にはライト谷のラビリンス地帯の大小の池まで調査が及んだ。しかしここでは、当初から1973/74年夏季まで5回に亘り調査に参加した私が撮影した画像によって、自然の一端をお目にかけることにしたい。なお、論文リストなどと観測生データは、国立極地研究所のJARE DATA REPORTS No.199, 1994 にまとめられている。

自然の姿：

・幅50kmほどのマクマード入江を越えてヘリで大陸へ、テイラー谷には氷食で平らにされた噴石丘や、侵食を受けていない噴石丘が点在する。



飛行機から望むテイラー谷



バンダ湖洪水



ラビリンス



アザラシのミイラ

- ・ライト谷上流にはラビリンス（迷路、迷宮）と命名された谷が発達する。粗粒玄武岩層が谷壁をつくるが、その仲間は遠くアフリカやタスマニアにみられる。ゴンドワナ大陸では繋がっていた。
- ・海岸から内陸へ 60km あまりも入ったと

ころに見られる何頭ものアザラシのミイラのひとつ、まだその謎は解けていない。

・夏季に融氷がオニックス川となって、海岸の方から閉塞湖の長さ 5km、最大幅 2km のバンダ湖へ流入するが、1970 年 12 月、突然大量の河川水が流入、湖の水位がこの夏、一挙に 239cm 上昇した。洪水である。気候温暖化？



C.S. Wright 博士。右から二人目は筆者

エピローグ：1964/65 年夏、私は大学の用務でひとり先に帰国することにした。たまたまこの時、マクマード基地にライト谷の地名に残る第 2 次スコット隊員 C.S. Wright 博士が滞在されていて、そのお話を聴くことができた。この時頂いた署名は私の宝物である。

南極再開 50 周年を来年にひかえて

—再開よもやま話—

川口貞男さん (2s,3w,8w,11s,13w,21w,26s)

日本の参加に反対意見も

再開の話をする前に「宗谷」時代の話を紹介する。日本が南極観測を開始するに当たり、IGY（国際地球観測年）の国際会議に出席し、南極観測への参加を希望したと

ころ、ニュージーランドやオーストラリアは反対だったが、アメリカ、ロシア、インドは了解してくれた。大きかったのは、白瀬南極探検隊がかつて南極に行ったことだ。

各国敬遠のハラルド海岸

基地選定は、日本が手を挙げたのが遅かったため、殆んど良いところは各国に握られていた。アメリカの砕氷船が周回し良いところを見て、この調査結果からプリンスハラルド海岸は「あまり良いところではない」との思いがあり、どの国も手を挙げなかった。候補地としてはプリンスハラルド海岸とピーター1世島があったが、ピーター1世島は島であることから、日本としては大陸であるプリンスハラルド海岸でやりたいということになった。

具体的な行動内容については文部省が日本学術会議に茅誠司先生を委員長とする「南極特別委員会」を昭和30年10月に設置した。この委員会は、企画立案に加え将来南極に行くかもしれない人を含めいろいろな人たちを構成員とした。筆者も候補者と言うことで、中央气象台から呼ばれこの委員会の委員になった。船については当初チャーターしたかったが適当な船がなく、「宗谷」で行くことになった。

まず予備観測を実施

隊長として永田武先生が決まり、その後西堀栄三郎先生が副隊長になった。観測隊員の訓練は、乗鞍岳や戸田の海岸で行われた。西堀先生の考えはIGYの時に本観測を行う、そのため前の年に荷物を運び、南極がどういうところかを視て来る予備観測と位置付けるが、出来れば少数の寒地経験者や「山や」で先ず越冬してみる事が必要ではないかということになった。結果的に予備観測を第1次隊と位置付けた。



開設当時の昭和基地

越冬の条件は発電機の稼働

最初は西オングル島に基地を建設する予定だったが、「宗谷」に近い東オングル島に物資がどんどん運ばれ、加えて重量が大き

い発電機を無事に東オングル島に揚陸したことも、東オングル島に基地を設置するに至った要因のひとつだった。



川口真男さん

建物は木造プレハブで12~13坪のものを3棟建てた。食堂、通信棟、居住棟であり、それにパイプ組立の発電棟である。越冬の条件は、まず20kVAの発電機が動くこと、通信ができることだった。この時の通信機は1kWで何とか日本と連絡が取れた。この条件により越冬許可が出た。後に、西堀隊長から観測装置が貧弱だったとのことのお話があったが、越冬事情を考えると仕方がなかった。観測装置のあまり必要でない地学調査と気象観測が年間を通じて出来、データは南極の地域センターであるオーストラリアのモーソン基地に毎日送られた。雪上車は小松製の雪上車が作られたが、スコット隊の経験から、犬を連れて行った。

IGYの本観測はアメリカの砕氷船バートンアイランド号の援助を受けながら、氷状が悪く基地に近付けず、1次越冬隊員は小型飛行機を海氷上から飛ばして「宗谷」に収容し、結局越冬を断念した。第3次隊では前年の失敗から、大型ヘリコプターにより氷縁から基地への輸送を計画し、約55tの物資を運び込めた。これにより、一年遅れとなってしまったが、IGYの観測が出来、気象部門でも高層気象観測を加える事が出来た。

第2次の越冬断念の際、南極本部はもう2年間の延長を決めたのであるが、さらに1年を加え、結局5次隊までの越冬とし、第6次隊により終了する事になった。

南極条約

南極はIGY期間だけでは終わるものではなく、各国に続ける気運があり、条約を結ぼうとの気運は早く、アメリカが昭和33年5月（即ち日本隊が第3次隊を送ろうとした年）に提案し、第1回本会議が34年10月にワシントンに於いて開催された。各国が批准し、発効したのは昭和36年6月であった。条約の骨子は、以下の通り。

1. 平和的目的のためのみに利用する。

2. 科学的調査のみは平和的目的のためなら軍の要員、備品を使うことはかまわない。
3. 情報の交換。査察
4. 自然保護など

南極観測の再開

4次で観測打ち切りの予定だったが5次、6次と続いた。

再開は、今までの観測の状況を振り返り、永続的に推進するためには、実施機関の創設が先ず必要とされた。将来問題委員会が設置され、輸送など種々の問題が検討された。

取りあえず国立科学博物館に極地学課が置かれ、村山雅美氏が責任者となり、私は、昭和38年に気象台から移ってきた。当面の問題として、一番大きな事は輸送がどこになるかであった。学術会議は防衛庁になることには不賛成の気運が強かった。しかし南極本部としては、ヘリコプター使用などいろいろな点を考えると防衛庁に頼むという方向にあり、社会党の人たちも納得して、防衛庁という事になった。

もう一つ大きな事は、取りあえず科学博物館に極地学課を置いたが実施していくには、将来的にも十分なスペースのある機関が欲しかった。以前、板橋にあった極地研究所の場所が候補地の一つとしてあがり、また将来的につくばなどの話もあったが、結果的に板橋に決まった。ここは戦中、軍が使用し、戦後、その頃の女学校が使っ

いて、その女学校が王子の方に移ったので、空いているという事で見に行き、結果的にここに決まった。「宗谷」が持ち帰った古い装備など、当時の水産大学の倉庫においていたものをひきとったりしていた。その後、この板橋は新しい極地研究所の建物になるのである。

一方、学術会議の南極特別委員会は昭和39年、再開後の基本方針を南極本部に提出した。

実施機関が明確ではなかったが、和達清夫氏を委員長とする将来問題委員会が設置され検討した。輸送主体が防衛庁（当時、以下同じ）となることに学術会議内に反対論があったが、和達先生はじめ関係者の努力が大きかった。

特別委員会が再開後の基本方針として南極本部に提出した骨子は以下の通り、

1. 定常観測と研究観測の2本柱とする。
2. 定常観測は、国際的観測の一翼を担い、基準が国際的に定められたもの。研究観測は学術研究上或いは実用上不可欠な基本的なもの。

3. 研究観測としてとりあえず要望されたものは、①ロケットによる超高層観測、②極点旅行、③内陸調査、内陸基地の設定。

昭和40年11月第7次観測隊（村山隊長以下40名）が「ふじ」で出発した。ふじの名称は一般公募、44万通の応募があった。発注者を防衛庁にすることは時期的に間に合わなかったため発注は文部省が行った。

話 題

「オーロラ会」の紹介

海上自衛隊が南極観測協力事業の海上輸送任務を担当した砕氷艦初代「しらせ」及び第2代「しらせ」の乗組員OB及び砕氷艦乗組員をご支援していただく一般の皆様で構成されるオーロラ会について、ここに2部構成に分けて紹介します。

第I部はオーロラ会の結成、第II部は現在のオーロラ会の活動の報告及びご協力・ご支援のお願いという形で申し述べたいと思います。

第I部：オーロラ会の結成・歴史

初代「しらせ」は第25次行動から任務を開始し、最終49次を最後に25年間の行動

を完遂され、退役後第2代「しらせ」にその任務を引き継ぎ、今年2015年4月には第56次行動を終え、帰国の予定であります。

さて、オーロラ会の結成と歴史を振り返って見れば「しらせ」就役時の乗組員（ぎ装員及び前任海曹OB有志）が退艦後OB会を結成しようとの機運に、第27次行動の帰国後初めて開催されたのが第1回目であり、第25次艦長（初代オーロラ会会長佐藤保氏）始め当時はOBのみであり乗組員を招いての会ではありませんでした。その後28、29、30次と南極行動支援任務は経過し第31次行動の壮行会が第1回目のオーロラ会としての乗組員に対する壮行会及び帰国歓

迎会の行事となります。この間の主なメンバーは、会長佐藤保氏、代表幹事久松武宏氏（故人）、浦和明氏（定年後辞退）、大根田明男氏（現代表幹事）、大木淳（事務局）で運営してまいりましたが幹事等諸役員の定年退官等による役員辞退等もありましたが少数精鋭の理念で現在まで継続しております。

この間南極 OB 会とオーロラ会のパイプ役として多くの功績を残していただいた、久松武宏氏（34・35 次艦長：2010 年 8 月ご逝去）には代表幹事として防衛省及び文科省（極地研関係者等）との調整交流などの継続にご尽力され、オーロラ会及び「しらせ」の発展を祈りながら天国に召されたことは誠に残念の極みでありました。同氏の志を糧とし次世代にこれらの功績を引き継ぐべく役員一同誠心励んでおるところであります。

初代「しらせ」は 49 次行動を最後に退役となり、第 2 代「しらせ」にその任務を引き継ぎ第 51 次行動より、オーロラ会会長が茂原清二氏（40、41 次艦長）に交代となり現在に至っております。

第 51 次行動以降 2 代「しらせ」乗組員からオーロラ会への入会者もあり現在では会員数は約 350 名を数え、今後オーロラ会の益々の発展を望むものであります。

第Ⅱ部：オーロラ会の活動



日高艦長へ花束贈呈 2014 年 10 月 18 日

オーロラ会の活動についてご報告させていただきます。主たる活動としては「しらせ」の南極観測支援協力行動時の出国及び帰国に際し乗組員の壮行・帰国歓迎会を行うことをメインに、その他体験航海のご案内などまた、最近の歓送迎会の一部様子を写真にてご紹介します。特に昨年 10 月 18 日に開催された「しらせ」第 56 次南極地域観測協力行動壮行に際し、南極 OB 会を代表して渡辺興亜先生からご祝辞を頂戴しま

した。

初代「しらせ」は 2010 年 5 月より、株式会社ウェザーニューズ（以下 WNI と称します）が管理運営を行うことになり名称を“SHIRASE”と変え千葉県船橋港にて一般公開等を行っており現在に至っております。我々オーロラ会として「しらせ」の後利用について WNI より検討の場を設けたいとの要請を請け 2012 年 4 月 21 日第 1 回の検討会を行いました。参加者は、南極 OB 会渡辺興亜先生、吉田栄夫先生、WNI 宮辺二郎様、興梶祐一様、三枝茂様、オーロラ会からは茂原清二氏、大平慎一氏他 13 名でした。



「チャレンジ SHIRASE」船内説明風景

2014 年 5 月 24 日

特に第 3 回目の 2014 年 10 月 20 日第 54 次帰国歓迎会の前段に行われた検討会には南極 OB 会小野様、オーロラ会会長茂原様他有志、WNI の 3 者による合同検討会を行いオーロラ会としての今後の方向性を確かなものとして意見集約ができました。

大筋としてオーロラ会として次のような協力ができることで参加者全員の合意を得ました。

- その 1：一般公開時における見学者の船内のご案内
- その 2：船体の整備（錆打ち塗装などの指導支援）
- その 3：初代「しらせ」保存の展示物等の情報及び入手（元乗組員保有の個人保有物の提供など）、すでに一部は船内に展示されております。

これらの協力（ボランティアとして）の活動の実績は 2013 年 12 月に行われた WNI 主催第 1 回一般公開の乗船者に対し船内案内を行ったのが最初でありました。

2014 年度は計 5 回の「チャレンジ SHIRASE」にオーロラ会有志による船内

「スペシャルツアー」として過去1度以上の乗船経験がある見学者を対象に行い大きな反響をいただきました。今後も引き続き同様な支援の他、今年は船体整備の方に協力して行ければと考えておりますのでOB諸兄には可能な限り我々が「しらせ」の延命策に協力していただき未来に渡り足跡を残すことができるよう邁進したいと思っておりますのでどうか本会の趣旨に賛同されご参加

をいただきたくここにお願い申し上げます。ご賛同していただける方は下記メールアドレスまでご連絡をお願いします。何時でも受け付けておりますので宜しくお願い申し上げます。

※オーロラ会事務局 大木 淳
※E-mail:ooki@marix.co.jp

村越 望さんご逝去

(1, 4次越冬隊、9, 10, 12次夏隊, 15次越冬隊長)

第1次南極観測隊越冬隊に参加されて以来、30年近くわが国の南極観測隊に関わられた村越望さんは平成26年9月7日にくも膜下出血で病床に臥せられ、薬効むなしく、10月13日未明に黄泉に旅立たれました。享年88歳でした。



15次隊では越冬隊長を務められました。

村越望さんは海軍兵学校から気象庁を経て、第1次、第4次越冬隊に気象隊員として、9次隊では設営隊員に転じ、10次、12次夏隊では副隊長として参加され、第

わが国の南極観測「宗谷時代」の後、科学博物館に移られ、設営計画の企画立案、現地設営計画の指揮に携われ、国立極地研究所設立以降は初代観測協力室長として、名実ともにわが国南極観測の設営分野経営の第一線に立たれ、その礎を築かれました。特に、観測隊への観測航空機導入に多大の貢献をされました。

平成26(2014)年12月14日(日)には、アルカディア市ヶ谷(私学会館)で「偲ぶ会」が有志により開催され、村越さんを知る先輩、同僚、後輩は一様にその暖かい人柄や、物事を考える能力、独創力の高さを話題にしながら故人を偲びました。以下に石沢賢二さんから追悼文を寄稿頂きましたので掲載します。

いつも「広がり」を考えていた村越さん

石沢 賢二

当時、国立極地研究所の事業部観測協力室長を務めていた村越さんのところへ私が新卒採用されたのは、1980年(昭和55年)でした。その頃の村越さんは、あまり元気がありませんでした。午後3時頃、どうも静かだなと後ろの室長席を振り向くと大抵居眠りをしていました。しかし、5時を過ぎると研究棟からいろんな人が観測協力室の広テーブルに集まり無駄話が始まります。そのうち、村越さんが「一杯やるか」と言い出し、我々若造は貰った千円札を握って



東京湾クルージングを楽しむ村越さん

近くの酒屋に走ったものでした。話しの多くは「南極観測としての内陸への展開」に関するものでした。村越さんの持論は常に変わらず、「南極観測の成否は輸送にかかっている」というものでした。いまから思えば、当然のことなのですが、当時の私は砕氷船や航空機など“力づく”で行う「輸送」には興味はなく、自然エネルギーを使った風力発電や、雪氷を使ったドーム状の構造物など、今でいうエコロジカルな設営をやってみたいと思っていました。同室に居ながら、仕事上の命令や指示はほとんどなく、おかげで私は自由にやらせてもらいましたが、やや寂しさも感じました。村越さんは、上司として先頭に立って部下を引っ張っていくというタイプとは正反対の人で、一人で静かに何かを考えている人でした。その頃はパソコンもないので、B4の罫線用紙に数値を書き込み何やら計算をしていました。内陸に雪上車や飛行機で荷物を運ぶときの輸送効率や、昭和基地に陸上滑走路を造る時に必要な土工量や工数などを考えていたようです。勤務中にそれを我々に示すようなことはなく、勤務時間後の酒の席などでチラッ、チラッと話すのです。私は毎日酒の席で聞くそういう話が最も楽しみでした。砕氷船に代わって輸送する大型飛行船やホバークラフト、無人トラクターでの内陸輸送、見晴らし岩沖への岸壁の造成、小型航空機を使ったセールロンダーネ山地の調

査などなど、現実的なことから夢物語まで様々でしたが、いずれの話もフワッとしたおおらかさがあり、ワクワクする内容でした。

定年が近づくにつれ、ヨットのことばかり考えていたようです。最初は小さな中古艇を購入し東京湾内を帆走しました。私も何度も乗せてもらい、操船法を教えてもらいました。その後、30フィートのキャビン付き木造船に乗り替え、名称を「ケセラセラ」から「わたつみ」と替え、南極ヨットクラブに発展、いろいろな人が週末に東京湾クルージングと談笑を楽しみました。夏休みには伊豆七島の式根島まで航海したこともあります。その頃私も世界中どこにでも行ける「1級小型船舶免許」を取りました。村越さんは単独で八丈島まで足を伸ばしましたが、その後、高齢のシングルハンドに見切りをつけ、海から陸に拠点を移し、新潟県の苗場スキー場付近に山小屋を建て一人で住み始めました。冬の長岡への出張の帰りに、ひょっこり訪ねて焼酎を飲んだ折、寒いからいいよというにも関わらず、小屋から離れたバス停まで吹雪の中を見送って、バスが見えなくなるまで手を振ってくれたのが、ついこの前のように思い出されます。傍から見ると一人ぼっちで寂しいはずなのに、そんなことは一言も口にしない村越さんでした。

南極関連情報

第57次南極地域観測隊長・副隊長決まる

2014年11月10日(月)に開催された第145回南極地域観測統合推進本部総会において第57次南極地域観測隊長兼夏隊長として門倉昭氏(30次越冬、44次越冬、50次越冬隊長)、副隊長兼越冬隊長として、樋口和生氏(50次越冬、52次越冬)を決定した。

文部科学省主催 第56次南極観測隊壮行会

2014年11月10日、明治記念館において南極地域観測統合推進本部主催の壮行会が挙行され、野木義史観測隊長、三浦英樹越冬隊長以下、夏期、越冬隊員58名、南極事業担当同行教員2名の他同行者、日高孝次しらせ艦長以下180名の乗組員および隊員

および乗組員家族、並びに関係者多数が出席した。壮行会では観測隊隊長、しらせ艦長から出発に当たっての決意が述べられた。また文部科学大臣(代理)、防衛大臣から壮行の挨拶があり、来賓の国会議員等から激励の挨拶があった。

谷垣自民党幹事長からは、「南極議員クラブ」発足の提案があった。「しらせ」は翌



11日に晴海を出港、観測隊は25日に出国し、豪州フリマントルで合流し、南極昭和基地に向う。

昭和基地に第一便

2014年12月24日現地時間8時02分(日本時間14時02分)、南緯68度46.6分、東経38度45.8分(昭和基地北西約40km)の定着水域に停留中の「しらせ」より、野木義史第56次南極地域観測隊長ならびに日高孝次しらせ艦長が乗ったヘリコプターの第一便が第55次越冬隊(牛尾収輝越冬隊長ほか23名)の待つ昭和基地に到着した。昨シーズン

と比べ10日遅い第一便となった。

しらせ3年ぶりに昭和基地接岸

しらせが、2015年1月12日(月)現地時間14時06分(日本時間20時06分)、昭和基地の沖合約500mの定着氷に到着し、昨年続き昭和基地接岸を果たした。今シーズンも海水は極めて厳しく、往路のラミング総数は計3187回で、南極行動において過去最多となる回数となるなか、海氷が厚く難所である多年氷帯を15日間かけて突破した。

「第一便」、「接岸」の両記事は、国立極地研究所ホームページより。

連載 支部便り②① (北海道支部)

第56次日本南極地域観測隊 壮行講演会・壮行会 開催

南極OB会北海道支部は、秋の恒例行事として、南極へ向けて出発する観測隊員で「北海道出身あるいは北海道にゆかりがある方」の壮行講演会及び壮行会を行っています。



北海道支部の皆さん

56次隊では、8名が北海道に何らかの関わりがあり、みなさまに声をかけましたが、出発前の準備の都合もあり、通信担当の戸田仁さん、医療担当の及川欧さんの2名、OB会会員が13名出席して、出発直前の11月18日に札幌市内の北海道大学学术交流会館で開催しました。

講演会では、前支部長(20次越冬)の挨拶からはじまり、戸田隊員からは、担当される通信の概要と南極では命をつなぐ重要な道具であることを「南極授業」として、隊員及びしらせ乗組員に勉強してもらったつもりであると、力が入った説明をされました。また、及川隊員からは、昔、所属する職場で南極の石を見てから南極行きに

あこがれ、南極で必要になると思われる免許や資格を取得し、強靱な体力づくりなど、日々南極行きのための努力を行ってきたこと、そして、観測隊員に選ばれるまでの人との「縁」について話されていました。



講演会の様子

OB会会員からは、現在の基地の情報を探るような質問や南極での心得、アドバイスなどがあり、相当古い隊員と真新しい隊員が「南極」話に花を咲かせていました。

引き続き、近くの居酒屋に場所を移して壮行会が行われ、佐藤幹事長(29次夏)の乾杯ではじまり、各OBからはそれぞれの体験談が語られ、あっという間に予定の2時間が過ぎてしまい、最後は、これから南極を目指す気象隊員候補の乾杯で締め、出発される隊員とOB会会員との交流が大いにはかれた次第です。

56次隊の方々のご健闘、無事帰国をお祈り申し上げます。

帰ってきたら、また、(一杯)やりましょう!! (幹事 長谷川裕(32次越冬))

支部便り②② (信州支部)

信州支部主催 56 次隊壮行会の報告

11月15日(土)に第56次隊参加の水谷剛生さん(設営一般, 夏隊)の支部主催壮行会を8名の参加で行いました。初対面の人もいましたが、しらせ船内での生活、夏の雪上での注意事項、そして昭和での夏作業について等、壮行会は引継の場にもなっています。話が弾んでアツという間に3時間が経過しました(店の計らいで2時間の飲み放題を1時間延長してもらいました)。

信州支部からの以前の参加者は、観測では信州大学の関係者、設営では調理と医療でしたが、ここ数年は山岳関係者が多くなっています。壮行会でも話題になりましたが、1次隊参加の佐伯一族(中部山岳案内人)ならぬ赤田一族(有明登山案内人組合)の様相です。水谷さんは、有明登山案内人組合ですが、ここ数年越冬を含めて信州の山屋が南極でも大活躍しています。信州と



信州支部の皆さん(真ん中にあるのが水谷さん)

言えばアルプスを連想する方も多いと思いますが、山岳ガイドを職業とする方も大勢います。この調子で継続して信州支部からの参加者の壮行会を開きたいものです。

信州支部ではこうした壮行会の他、夏には南極観測の広報を目的として「青少年のための科学の祭典」に参加しています。信州大学のキャンパスがある長野・上田・南箕輪村・松本で開催されるため、それなりの効果を感じています。合わせて今年は、久々に支部総会の開催を予定しています。

(幹事長 荻無里 立人)

支部便り②③ (茨城支部)

茨城支部 2014 年の活動報告

茨城支部は南極50周年記念事業に合わせ2006年4月1日に発足しました。以来、定例的な行事として隊員の帰国報告会と壮行会を実施しています。以下に2014年の支部活動のあらましを紹介します。

帰国報告会と昭和基地中継の開催



昭和基地⇄つくば衛星中継の様子



56次隊員壮行会に参加した皆さん

帰国報告会は、近年は「つくばエキスポセンター」と共催で“ミーツ・ザ・サイエンス”のイベントとして実施しており、本年も9月20日に実施しました。帰国報告として、この3月につくばに帰国された第54次越冬隊の井智史氏が「南の果てで探る地球・宇宙のフシギ～南極観測隊について～」の題目で南極観測隊の概要からオーロラ観測

まで、第55次夏隊の植田勲氏が「昭和基地から野外へ!!」の題目で主に野外観測について講演しました。両者とも動画をふんだんに用いた講演内容となっており、南極観測について予備知識のない人でも大変分かり易く、来場者の反応も良い印象を受けました。また、本年はつくば市職員の塚本健二氏が第55次の越冬隊員として越冬

中であつたことから、つくば市とも共催で生中継も企画しました。

生中継は、第 55 次夏隊で帰国した松下隼士隊員の司会進行のもと、昭和基地の塚本氏をはじめとする多くの越冬隊員が、来場者からの質問に対して丁寧に回答しました。中継後には次期隊員の紹介、南極氷の配布、羽毛服を着ての写真撮影や OB 会員との個別の質疑応答が行われ、短い中継時間に質問できなかった来場者へのフォローも行うことができました。本年の会場は例年よりも広い玄関ロビーで行われたこともあり、結果として来場者が 100 名を越える盛大なイベントとなりました。

56 次隊員壮行会

壮行会は、茨城支部の発足より古い 1988 年につくば地区の有志により始められた“つくばオーロラ会”が脈々と催されています。つくばオーロラ会の幹事はつくばにある機関（国土地理院、高層气象台、産業技術総合研究所、気象研究所）が持ち回りで担当していましたが、2008 年の第 50 次の壮行会からは、直近の帰国者が担当しています。本年は 11 月 5 日に第 13 次隊から第 55 次までの 17 名の参加者が集まり、つくばにゆかりのある 5 名の第 56 次隊員を壮行することができました。開会に先立ち、

安仁屋支部長から、「つくばオーロラ会は普段交流の少ない各隊次間のつながりを持つことができる貴重な機会である」とのお言葉をいただき、隊次の異なる隊員同士も交流を深めることができました。

おわりに

茨城支部では、帰国報告会や壮行会のほかにもつくば地区と日立地区との交流キャンプ、つくばエキスポセンターと共同で雪上車の整備や展示なども適宜行っています。

雪上車は、2011 年に昭和基地から帰国した SM254 です。整備は第 34 次の石塚氏を中心に、つくば地区はもとより日立地区や鹿島地区の OB 会員も交えて進められ、今では見違えるほどの美しさを取り戻しました。本年も 4 月 29 日に清掃作業等を行いました。以上、簡単な報告ではありますが、茨城支部活動にご興味を持たれた方がおられましたら、茨城支部のホームページでも雪上車整備の動画など活動の様子をご覧ください。最後に、本年の行事にご協力いただいた OB 会員、現役越冬隊員、極地研、つくばエキスポセンター、つくば市役所のみなさまには、事前の周知な準備を含め茨城支部の活動にご協力いただき、どうもありがとうございました。

（茨城支部幹事長 島村哲也）



連載「帰国後の各隊の動き」（隊次順に掲載）

第 11 次隊「三陸旅行」

台風 18 号が近づく 2014 年 10 月 5 日から 6 日にかけて、第 11 次隊は東日本大震災の復興の様子を見たくて、総勢 11 名（当時 40 名中）が参加して東北の三陸方面を旅行した。東京から東北新幹線で盛岡まで行き、山田線に乗り換えてチンタラチンタラ宮古まで田舎電車の旅。宮古のホテルに着き、浄土ヶ浜海岸へ出て奇岩を眺めて、嵐の前の静けさのひと時を楽しんだ。明日の台風接近を気にしながら、夜は大宴会を開催、全員集合写真をパチリ。

翌朝は予想通り（？）の雨、アメ・・・。レンタカーを用意して、いざ「三陸の断崖クルーズ」で絶景を鑑賞することだったが、



第 11 次隊 東北三陸旅行（2014 年 10 月 5～6 日）
浄土ヶ浜パークホテル玄関前

台風接近で船の出航は中止となり、狭い車の中でのドライブを堪能（？）しました。

でも、神秘的な鍾乳洞「龍泉洞」を見学することとなりました。昼食後、久慈を經由して新幹線の二戸駅から帰路についた。遠く鳥取や大阪からの参加もいて和やかな隊次旅行でしたが、何故か台風と親しくする

参加者がいてメインの「三陸の断崖クルーズ」が中止になったことが残念でした。
(里見 穂)

27 次会で白瀬南極探検隊記念館を訪問

2014年7月29日～30日にかけて、越冬28周年記念の27次会(27次の集まりをいう)を13名の参加で開催しました。今回の企画は秋田の佐藤さんの提案で、白瀬南極探検隊記念館(以下、白瀬記念館)訪問をメインに白瀬轟の生誕の地を訪ねて岩牡蠣パーティを行うことを目的としました。例年、秋に行っていた27次会ですが、岩牡蠣のシーズンである初の夏開催、そして夏休みの混雑を避けるため初のウィークデイ開催となりました。まだ、現役組がいるため、やはり都合がつかず不参加となる人が数人いました。

東京からの電車組は車内でのアルコール摂取量を控えめにしました。実は、前回秋田で開催した27次会は、車内での宴会であまりにも勢いがついてしまったため、その教訓からの措置でした。秋田駅に到着後、別ルートで来た皆さんと合流して、にかほ市の白瀬生家(浄蓮寺)を訪ねました。数年前に開催されたしらせ100年に多少の関わりを持った者として墓参ができたことは、感慨深いものがありました。次に、白瀬記念館を見学しました。記念館でしか見ることのできない白瀬探検隊の資料を拝見できました。見学後は、記念館の庭で、この時期でしか味わえない岩牡蠣バーベキューで記念館の関係の皆さんと交流しました。皆さんのお話から「今度は個人的に浜で牡蠣を仕入れたい」という声もありました。

宿泊場所となった「にかほ市温泉保養センターはまなす」での2次会では多方面に

わたる内容のお話で大いに盛り上がりしました。毎回の事ですが、車座になって話をしていると、その雰囲気は28年前の昭和にタイムスリップします。時計の針が翌日になっても話が続いたようで、ほとんどの人が宴会部屋で翌朝を迎えていました。翌日は石沢賢二さんの力作をはじめとする風力発



27次隊と関係者の皆さん

電の現場を見学することができました。

帰りの新幹線は全員が深い眠りに落ちていましたが、とにかく本当に楽しい2日間でした。今回は木暮さんが同伴で参加してくれました。今後は家族で参加できる27次会になっていくでしょう。帰りの車内で、内藤隊長から「次回は全員集合とする」との話がありましたが、今年はお出航30周年になるので一大イベントを企画します。

今回の27次会開催にあたり、秋田駅からの送迎をはじめ白瀬記念館の関係の皆様には本当にお世話になりました。厚くお礼申し上げます。ありがとうございました。

(27次 荻無里 立人)

第35次南極観測隊20周年同窓会

—懐かしいSHIRASE5002にて—

2014年9月27日(土)、SHIRASE5002(旧しらせ)を会場として、第35次南極観測隊20周年同窓会を開催しました。

現在SHIRASE5002は一般財団法人WNI気象文化創造センターの管理のもと、千葉県船橋港で第二の人生を歩んでいま



35次隊の皆さん 懐かしい観測隊員公室にて記念撮影

す（詳細は <http://shirase.info/>参照）。20周年同窓会では、まずこの SHIRASE5002 に何か貢献をしようということで、当時の写真や説明パネルのほか、作業着、シノ棒、ヘルメット、下着に至るまで（中にはゴミでは？と思われるものまで）を皆で持ち寄り、船内の一室を再現して見学者用にディスプレイしました。夕方からは SHIRASE5002 に隣接するサッポロビール千葉ビール園にてジンギスカンとビールで大いに盛り上がり、その後、観測隊員公室に場所を移し、当時のビデオ映像を見ながら夜が更けるまで語り合いました。

同窓会には渡辺興亜観測隊長、横山宏太郎越冬隊長を始めとして、北海道や京都、新潟など各地から総勢 28 名が集いました。35 次隊は、旧しらせの時代で唯一昭和基地に接岸できなかった隊なのですが、共に困難に立ち向かった海上自衛隊の安摩さんに

もご参加頂き、一緒にしらせの船内を散策すると、当時の厳しくも一致団結した日々が昨日のように思い出され、大変懐かしく



資料展示のディスプレイ作業風景

楽しい時を過ごすことが出来ました。

SHIRASE5002 への乗船においては、WNI 気象文化創造センターの三枝茂様（37 次夏）と関係者にご多大のご尽力を頂きましたことをここに感謝いたします。

（35 次宙空担当 久保田実）

新刊紹介

南極観測船「宗谷」航海記～航海・機関・輸送の実録

南極 OB 会編集委員会 編

（成山堂書店 2014 年 12 月発行 292 頁 本体 2500 円+税）

「宗谷」の奮闘がなければ、越冬を重ねて「ふじ」「しらせ」の時代を開き、ここまで発展してきた日本の南極観測は、どうなっていたのだろうか。この創成期の行動が既に半世紀以上を経て、“伝説”の彼方の話になるかという時期に、実録本として生き残った。本書は乗組員として氷海に向った当時 20-30 才台の若者達が 80-90 才台になった今、机に向かって奮闘して生れた貴重な遺産といえよう。

本書の内容は航海記(第 1～3 次: 約 50 頁)と航空オペレーション(第 3～6 次: 約 40 頁)を軸とし、機関・氷上輸送・医療・主計(糧食ほか)・随行の海鷹丸・観測隊員の記録・コラム 9 篇など多岐にわたる。文章は簡潔で骨太、事あれば胸の熱さが伝わり、要所では船体のきしみが聞こえるかのように詳しく記される。貴重な写真の数々や要点をつかんだ図表に諸資料なども盛り込まれ、当時を分りやすく再現する。

総勢 22 人の著者が多様な記事を展開す

るので、読者は個々の興味に応じた読み方を楽しめる。強力な米ソ砕氷船の救援やタロ・ジロなど周知のトピックの背景を見つ

けたり、こんなことがあったのか！と胸を打つ場面にも出あえることだろう。

著者の多くは大切に保存していたご自身の克明な記録から、手書きで原稿を起されたであろう。高齢を感じさせない著者の方々のご努力と、それらを整理・編集して不足を補い、見事に本としてまとめ上げた南極 OB 会の編集事業にも敬意を表したい。その協同作業の成果が本書であり、手にすれば、幅広い世代・分野にわたる南極 OB の方々には、それぞれにとって相応の意味がある図書になるでしょう。

（上田 豊）



* 購入を希望される方は、南極 OB 会事務局に連絡ください。 *

2015年における「先代しらせ」の公開予定について

一昨年より「先代しらせ」(現 SHIRASE)において、「チャレンジング SHIRASE」と称し、地域の皆様が SHIRASE で五象(宙象・気象・海象・水象・地象)・五季(春・梅雨・夏・秋・冬)を五感で楽しめる体験型の一般公開を行い、好評を得てきました。引き続き 2015 年も次の日程で公開をしておりますので、皆様もお誘い合わせの上、お越し頂ければ幸いです。

第 1 回(地象): 3 月 29 日(日)、第 2 回(水象・自衛隊マリンスフェスタと併催): 5 月 23 日(土)、24 日(日)、第 3 回(海象): 7 月 20 日(月祝)、第 4 回(宙象): 10 月 18 日(日)、第 5 回(気象): 12 月 20 日(日)になります。開催内容の詳細については、<http://shirase.info/>にて都度ご紹介しております。
(三枝茂: 一般財団法人 WNI 気象文化創造センター)



おめでとうございます: 叙勲、受賞

井上正鉄 氏 (27 次冬) 平成 26 年度地域文化功労者文部科学大臣表彰

永年にわたり、秋田県文化財保護審議会委員等を務め、地域文化の振興に貢献

渡辺佑基 氏 (52、53 次夏) 著作『ペンギンが教えてくれた物理のはなし』が、

第 68 回毎日出版文化賞の自然科学部門を受賞

訃報 ご遺族や会員の方からお知らせ頂きました。謹んでお悔やみ申し上げます。
(敬称略)

お名前	隊次	部門	逝去月	享年	お名前	隊次	部門	逝去月	享年
佐藤孝司	宗谷 1		H26. 9	93	中西秀二	8w,12w	気象	H26.10	88
村越 望	1w,4w,9s,10s, 12 夏隊長,15 越冬隊長		H26.10	88	古川克比古	会友		H26. 4	85
					金子英樹	15w	地球物理	H26.12	74

南極 OB 会アーカイブ事業報告

南極 OB 会は元観測隊員等が保管していた隊運営資料、生活一般資料、観測・設営機材、装備・衣料品、記録ノート、スライド、写真、グッズ等を常時、受け入れています。資料の受け入れについては南極 OB 会事務局にお気軽にご相談ください。

第 18 回「南極の歴史」講話会、4 月に秋田で開催

第 18 回「南極の歴史」講話会を秋田支部と協力して秋田県にかほ市で本年 4 月 18 日に開催するべく準備を進めています。第 18 回は初めて東京以外の場所で開催します。

*** 広報委員会からのお知らせ ***

○通信費納入のお願い

今年度最後の会報を皆さまにお届けします。まだの方は通信費の納入をお願いします。

南極 OB 会事務局 〒101-0065 東京都千代田区西神田 2-3-2 牧ビル 301

電話 : 03-5210-2252 FAX : 03-5275-1635

メール : nankyoku-ob@mbp.nifty.com

郵便振込: 加入者名 南極 OB 会 00110-1-428672

南極 OB 会ホームページ : <http://www.jare.org/>
